

(現代語訳) 都鳥

もうすぐやって来るあなたを待つ舟の中は
何となく心が躍ります。

「お前、懐かしいねっ」て、都鳥は行き交う人に
名前だけは聞かれるけれど、もう何代も前から
ここ、隅田川にいるのよね。

土手の葉桜は水面に花の影を浮かべて、風流だよねえ。

川上の遠くに降った雨が晴れて、
あなたに逢う夜を、待乳山で逢えて嬉しかったわ。
あれ、見てよ。

都鳥が翼を被い交わしているわ。

わたしたちも愛し合った夜がいつしか更けて、
今は、水の音しか聞こえない。

互いに思い思うて、深みに溺れてしまったみたい。

一晩中、身体を求めあったり離れたりと、乱れ合ったわね。

もう別れの朝の、明け六つの鐘が響いている。
つれなく帰るあなたはホント憎たらしいわね。

ああ、夏の夜も明けてしまった。

令和五年六月八日

大中臣正比呂 拙訳

